

参考文献

- 大沼忠春 1989 『美沢川流域の遺跡群 X II』 北埋調報58
 遠藤香澄 1990 『美沢川流域の遺跡群 X III』 北埋調報62
 中田裕香 1995 『千歳市キウス 5 遺跡(4)B地区・C地区』 北埋調報116

4 C地区出土の石製釣針

今年度C地区において、石製の釣針が出土した（VII章4節、図VII-4-9-106、図版41-4）。片岩⁽¹⁾を用い、すりによって整形されたものである。包含層からの出土で、土器を伴っていないため時期は断定しがたいが、IV層直下という出土層位から、おそらくは縄文時代後期末から晩期初頭のものと思われる。

石製の「釣針」とされるものの出土例は非常に少ない。東北地方でいくつかの出土例を確認した。仙台市北前遺跡の土壌覆土出土の資料（土壌は縄文時代前期末、図VII-4-1-2）、陸前高田市堂の前貝塚の表採資料などである。これらは、黒曜石や頁岩を素材とし、剝離によって整形されている。形態的には、骨角牙製の釣針よりも、むしろつまみ付きナイフや、後期末から晩期初頭の異形石器と呼ばれるものに近い。石材、技法、形態などの点で本例との類似点はまったくないと言える。

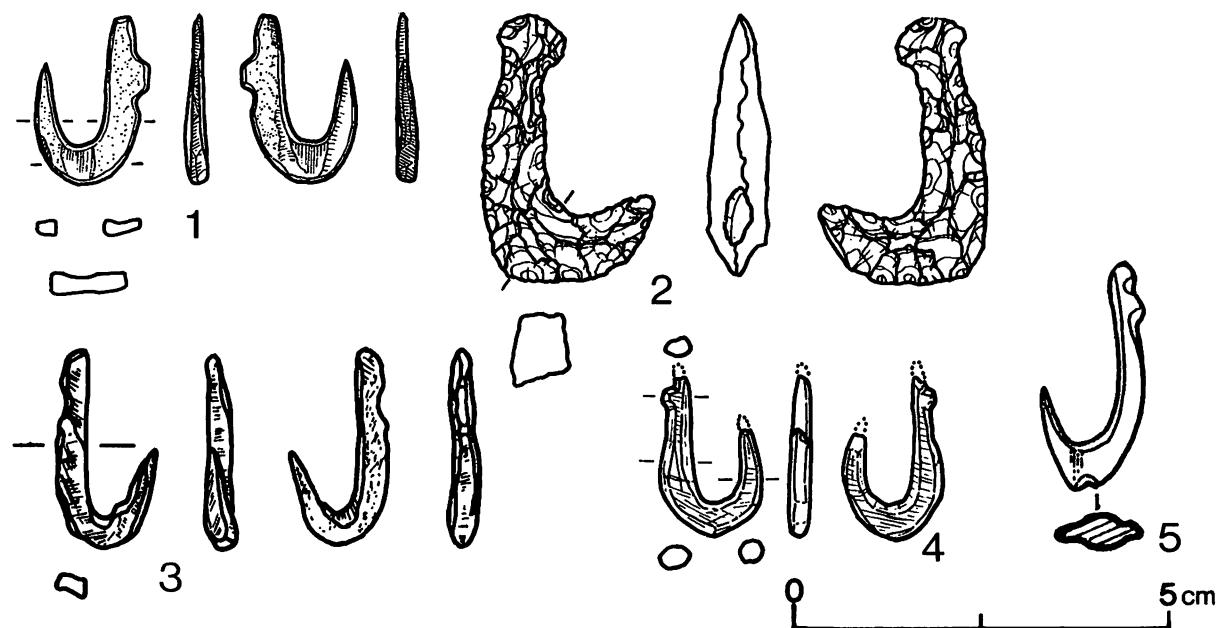
今回出土した石製釣針は、J字形で、鎌がなく、湾曲部に縦方向の溝状のすり痕がみられる。製作方法としては、薄い板状の片岩を用い、擦り切り技法の要領で中央部にすりを加えてJ（あるいはU）字形の素材を作り、その内・外縁をすることによって整形する、という手順が想定される。こうした形態や製作方法から、本例は、前述のような現在「釣針形石器」等といわれているものよりも、むしろ骨角牙製の釣針に類似している。特に類似するものとして、泊村茶津貝塚（縄文時代中期末葉、図VII-4-1-3）、宮城県気仙沼市田柄貝塚（縄文時代後期中葉から晩期末葉、図VII-4-1-4）、福島県いわき市大畠貝塚（縄文時代中期後半から晩期前葉、図VII-4-1-5）などから出土している釣針がある。材質は、茶津貝塚では海獣の犬歯が、田柄貝塚と大畠貝塚では鹿角が主に用いられている。いずれも形態的にはJ字形を呈しており、鎌のないものが多くみられる。製作技法としては、細部の違いはあるが、いずれも鹿角や海獣犬歯からまず板状の素材を作り、すりや削り込みによってJ（あるいはU）字形を作出し、それにすりを加えて整形する、という共通する手法が想定されている。

今回出土した石製釣針は1点のみであることから、キウス5遺跡において石製釣針が一般的な漁労具であったとは考えられない。このことと、上述のような骨角牙製釣針との形態的な類似および、製作技法の共通性から、この石製釣針は、おそらくは骨角牙製の釣針を模倣して作られたものと考えられる。

(1) 材質に関しては、国立歴史民俗博物館の西本豊弘・神庭信幸の両氏の御厚意により、蛍光エックス線による成分分析を行った。その結果、鹿角等の可能性はなく、岩石であることが確認されている。石質に関しては、当センターの花岡の肉眼鑑定により、片岩と鑑定されている。
 (柳瀬)

参考文献

- 川内 基 (1991) 「北海道縄文期にみられる海獣犬歯製釣針について」『北海道考古学』第27号
 仙台市教育委員会 (1982) 『北前遺跡発掘調査報告書』
 福島県・いわき市教育委員会 (1975) 『大畠貝塚調査報告書』
 北海道文化財研究所 (1990) 『茶津貝塚』
 宮城県教育委員会 (1986) 宮城県文化財調査報告書第111集『田柄貝塚III 骨角牙製品・自然遺物編』



図VIII-4-1 石製釣針の類似例

(1:キウス5遺跡、2:北前遺跡、3:茶津貝塚、4:田柄貝塚、5:大畠貝塚)